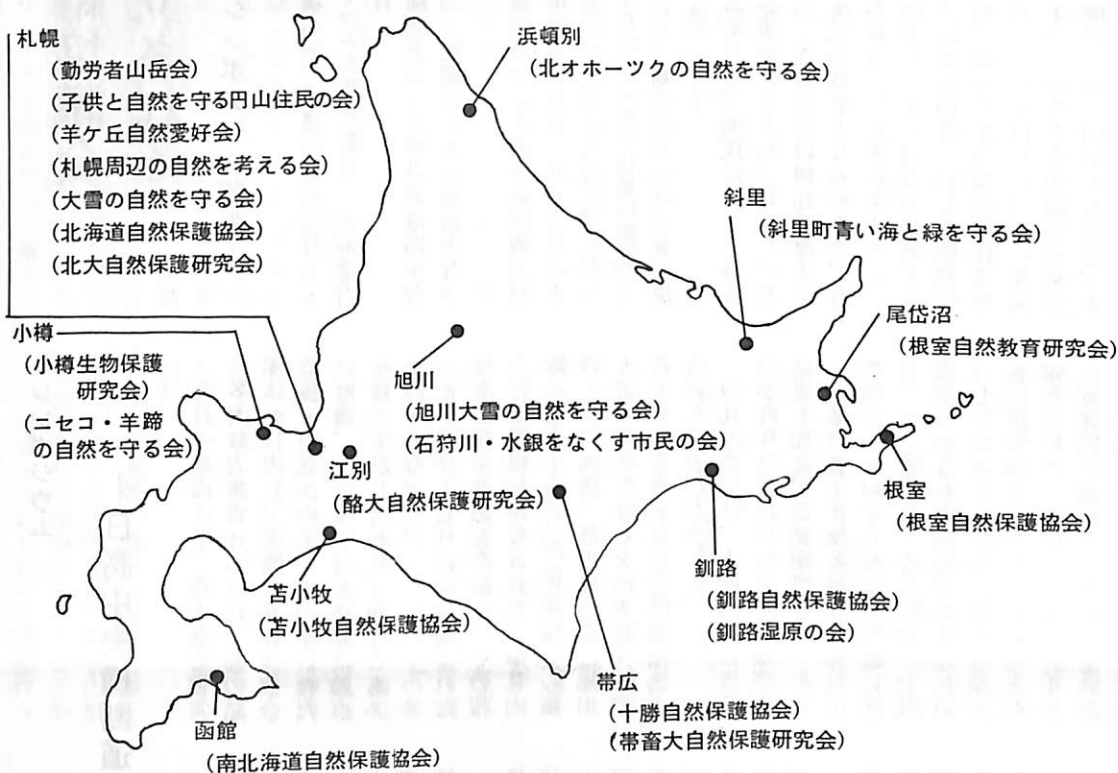


北の自然

第10号

1979年11月16日



主な記事

● 日高山脈を守る連絡協議会設立される

— 第9回北海道自然保護シンポジウム報告 —

日高山脈を守る連絡協議会 設立される

—第9回北海道自然保護シンポジウム報告—

遠く初秋香る日高、大雪の山脈を抱く豊稔の地、十勝の懐で九月一日の両日、第九回北海道自然保護シンポジウムが催された。(北海道自然保護団体連合主催・十勝自然保護協会主管)
当地は今大会議事提起となる、日高中央横断道路・士幌高原道路を背後に控えているため、活発な論議と相まって、二問題が大きな焦点となった。

特に日高中央横断道路計画については、前回のシンポジウムでの反対決議を踏まえ、積極的な運動づくりを中心に話し合われ、九月二日の大会終了日を持ち、「日高山脈を守る連絡協議会」が発足するはこびとなった。参加した五〇数名の方々からは、多岐にわたる日高の価値の側面や、運動上の様々な問題点が出されたが、今後とも一層運動を広げ、強く反対していくことを確認した。

従来、政策決定者である政治家は国民のニーズと、国民にとって善なるものとの対立を巧みに妥協させ環境政策を決定してきた。しかし、この妥協が環境の正しい理解や運用を常に歪めてきたことは周知の歴史である。本来、環境に関する事実が公共政策決定の基準となるべきで、今まで何が国民にとって善なのかという観点が抜けていたといえよう。

この意味で、日高はニーズとして道路の必要性、また善なる価値として貴重な自然が問題となり、問われている。日高の場合、いくら開発による利益が、環境面でのそれより大きくても、将来人類の環境条件にマインナスをもたらすものであれば開発は許されるべきではない。良い環境をつくる文明は決して妥協の政治からは生まれないことを認識する必要がある。このことを念頭に、今大会で日高同様大きな問題となった、士幌高原道路をも強く反対しなければならぬであろう。

シンポジウム

—日高中央横断道路計画—

九月一日の正午、今大会の運営に多大な力を寄せられた十勝の諸団体を代表し、十勝自然保護協会会長・西武氏のあいさつを聞いた後、夕方まで日高道路に論点を絞って話し合われ、熱のこもった内味となった。

まず、今年七月初め実施された日高山脈現地調査を踏まえ、その報告と問題提起がなされた。中札内隊からは十勝自然保護協会の藤巻・及川両氏。静内隊からは旭川大雪の自然を守る会の寺島氏が、各々の報告者となり、問題指摘を含めた発表がなされた。

中札内側では、十勝自然保護協会が昨年九月に行なった現地調査結果も加え、道路ができた仮定し、薄い表土に拠る緑化復元は川の増水等に耐えられない状態にあること。さらに、昨年同様、七月段階でかなりの残雪が崩壊地に点在していることから、将来雪崩の強い影響が考えられることなどが報告された。次に、一九六五年帯広管林局の資料をもとに、道路計画の問題点が説明された。具体的

には、予定地は崩壊地が多いこと。急峻な地形であること。当協会が以前指摘した、完全な自然環境調査が行なわれていないこと。さらに道路の経済的メリットについても、実証性の無い奥地開発協会の資料をまじえ、疑問と矛盾点が指摘された。

静内側については、北海道電力株式会社の大川・静内ダムと現在建設中である高見ダムの現状や、大雪狸台林道との比較をまじえ、問題点があげられた。一つに、中札内以上の傾斜があり、特に五〇〇〜七〇〇メートル付近は急峻であること。次に七〇〇メートルに至るまでに貴重な針広混交樹林帯があることなどがあげられた。

この後道連合田中事務局長が司会となり全体討議となった。田中氏からは今年八月に上京して得た、環境庁の動向についての説明や、全国自然保護大会での訴え等を含む、日高問題の活動経過報告がなされた。

その後、今後の活動方針を含む以下の五点が討議された。

一、林業と日高

日高中央横断道路の静内側は林道からの昇格を前提とするので、この点を踏まえ日高山系での林業施設の経過と問題点を中心に説明があり、それを受けて討議された。

日高山脈の林相は、十勝側が樹の細い広葉樹林帯を形成しているのに対し、日高側は針葉樹林帯を含む良好な混交樹林帯が存在しており、林業施設の重要な対象となっている。この為、現在の日高におけるさまざまな林道工事や、今後の無謀な作設を考えると林野庁への働き掛けも忘れてはならない。またこのことは、独立採算制に伴う林政のゆがんだ状況にも係ることなので、既存林道による適正な林業育成、財政の改善、木林消費の見直し等も含め考える必要がある。

二、道路の経済的メリット

中札内側では、生活圏の拡大、緊急時における物流の向上、上札内の産業等の振興を掲げているのに対し、静内側では道路に伴う地場産業(特に観光)の振興というように産業色が強い。しかし、この道路による地域の経済効果を考えると、冬季節及び霧等天候の制約はさげられない。時間的にも日

勝道路・黄金道路・道々浦河・大樹線で用は足りるのではないかと、むしろ、貴重な自然を破壊し、巨費を投じるのであれば、日勝等既存道路の整備の方が有効であろう。

三、札内川上流の砂防ダム

七ノ沢出合いの一号ダムなどの様に、開発局は依然砂防ダム計画を明らかにしてはいない。砂防ダム建設の上流への進行、及び工事用道路(作業道)延長などの悪循環は、十勝においても強く認識されている。十勝の自然保護団体としても今後、ダム建設の目的を明らかにしていくと共に、その悪影響をなくすよう検討を重ねていくことが話し合われた。また、帯広市の水問題との係りについても指摘された。

四、日高の自然

昨今の本州の山岳地帯における乱開発は凄じいものである。それに比べ日高山脈は、原始性を保つ自然を有している。この自然を愛し利用する多くの登山者は、素晴らしい自然の特異性を感じては、日本の日高であることを疑わない。この特異性、つまり沢づたいに長いアプローチを進んだり、厳冬への果敢な挑戦など、道路ができる

ことで失なわれてしまう。また増加するであろう登山者の状況を考慮しても、登り甲斐のある山、あるいは経験や力の合致した登山のあり方からも道路をつけるべきではないとの意見が多く出された。「遙かなるベテガリ」で象徴される自然豊かな日高を北海道の、ひいては日本の宝として保護したいものである。

五、今後の運動の進め方

「日高山脈を守る連絡協議会」を設立し、環境庁・道・開発局等行政に対し働きかける。現地調査や学習会を行なう。さらに、運動日高山脈を将来に良好な状態で残すこととを全国的に広げるため、情宣活動はもとより、写真展・講演会・集会等を行なう。以上の各方針が決められた。しかし、地元運動づくりについては(地元定義が問題ではあるが)未だ静内町、中札内村に組織がないことなど、問題が残されているため、話し合いを求めるとななどがあげられた。

また、運動形態が(固定公園化前であることを除けば)大雪山縦貫道路の時と類似していることから、両者の比較も併せて運動作りについて討議された。

やはり、地元の理解が運動の輪を広げるために不可欠であるから地元への地道な働きかけが必要である。同時に道路による地域振興という旧態依然の発想から、各々の自治体が自らの手で街づくりを行なうという民主的方向についても話し合う必要があるのではないかと意見が出された。こうした意見を受けて、大雪の時と同様、さらに一層の話し合いの中から、地元も含めた広範な運動をつくり上げていくことが確認された。

士幌高原

道路問題

現地での報告から

大会二日目は、帯広市の北方、大雪山系にある「道々士幌・然別湖線」(通称士幌高原道路)の巡検と、それをもとに道路問題が論議される予定であった。しかし、当日の東・西ヌブカウシ山、白雲山を有する現地は濃霧と雨に見舞われてしまった。折角の巡検がパスの中から既存道路とその周辺を見るに留まった。それでも所々でバスから降り、白雲山中腹の工事現場の法面緑化状況や、脆弱な当地の地質を確認することができた。その後、参加者は白雲山麓の北大士幌小屋に移り、暖かい紅茶

を飲みながら討議に入った。

まず十勝自然保護協会の上村氏から士幌高原道路計画の経過と問題点が説明され、当協会が計画反対に至った経緯も加えられた。

討議の中では、士幌高原の自然の価値、例えば低標高でありながら高山植物群落がある等が報告された。次いで問題点として、ナキウサギ、エゾシカなどの生息地や、植物学上重要な低標高における高山植物帯を分断する可能性が強いことがあげられ、道路の開削再開という現状指摘もなされた。

さらに、既存道路（一部開削済）の為、昭和四八年頃から盗掘者が多く入っており、このままのままで放置にも問題があるとし、厳しい監視の必要性が出された。

その後、道路を巡っての最近の鹿追・士幌両町の状況も報告があった。しめくくりとして十勝自然保護協会から、今後とも現存の法面は完全に緑化復元し、未開削部分については開削取り止めの方向で運動していくことが述べられ、士幌問題の討議は終えられた。

最後に、昨日夕方行なわれた、代表者会議の報告がなされ、同時に、九月二日をもって「日高山脈を守る連絡協議会」が設立された。

日高・士幌に限らず、北海道の自然は狙われ続けている。我々の現在の生活にとっても、子孫にとっても、緑の空間はなくてはならないものである。自然を保護する上で、運動論等問題もいくつかあるが、絶えず現状を確認し、運動を進展させ、北海道の残された自然を将来に伝えたいものである。自然保護は現代に生きる者の責任でもあると考える。

(小野 克巳)

アピール

- 一、士幌高原道路計画に反対
- 二、原始性豊かな日高山脈を保護するため、日高中央横断道路に反対
- 三、自然と林業を破壊する大模範林業構想に反対
- 四、白水沢地熱開発計画に反対
- 五、忠別ダム計画に反対
- 六、釧路湿原の天然記念物指定の拡大をはかる
- 七、知床の鳥獣保護区設定をはかる
- 八、風連湖の自然を破壊する東梅・本別海線計画に反対
- 九、知床横断道路、ウトロ側の既存道路整備をはかる。

ちよつと一言

八月の末ともなると北海道は秋に近い気候に変わります。ところが本州はまだまだ残暑お見舞でもしたくなるほどの暖かさ。日本列島の形を地図で見ると、もなく、膚で感じることができまます。

機会あって同じ頃、東京に行きますと道産子には、街全体がサウナのように思えたのです。それもそのはず三〇度を超える気温と高い湿度、どこを見ても人ばかり。住めば都とは言いますが私には到底無理のようです。太平洋から一転して日本海へ。富山市と金沢市、欲を出して新潟市へと旅してみました。各々の街には各々の顔があります。整然と歩く都会派紳士もいれば、色黒の潮の香をフンペンさせる男もいる。そうかと思えば袖の着物につづれの帯の似合う女もいる。こうした顔に出会えるのも、汽車の旅の楽しみの一つです。出会いと云えば、新潟で「幻の名酒」と会えずにまいに終わったことが心残りなのです。酒好きの鼻をもつてしても、かぎつけられないのですから。そこが「幻」と名付けられる所以なのでしょう。

酒の話は別として今回の旅の

目的は全国自然保護大会に参加することにありました。重い雲から時折降る雨の中、車で会場の富山市城山の呉羽ハイッに向います。会場に入るその時から、例年の趣きと違うことを感じました。実行委員の全員が大学二年を中心とする学生ばかり。愛い愛しい元氣一杯の若者による、手作りの大会でしたが、中味についてはパネルディスカッション等、いささか散漫で精彩さに欠けていたといえます。それでも次から次と、運動を担う人たちが現われる限り、明るい展望が開けます。

(明)

原野の昔ばなし

—その九—

坂本直行



忍術使いの泥棒

そのような原野にはね、いろいろ伝説めいた話が残っていますよ。私の入った近くに、お寺の坊さんあがりだっというんですけれどね、農夫やとった人がいたんです。帯広までの距離は十八里です。四倍するとキロになります。これだけの距離をね、一晩で往復して銀行で泥棒しとったんですよ。金を盗んでいたんです。どうしても分らなかつたんですよ。誰しもね、それだけの距離を一晚で歩いて、しかもちゃんと夕方普通に仕事終わってですよ。暗くなつてあがつて、それから風のごとく。忍術使いが紙を胸に当てて紙が落ちない速さで歩くという話がありますけれど、まさにそれなんです。そして銀行で金かっぱらつて歩いて帰っ

大事な五円

それから、そのすぐ隣にね、人のいい百姓がおりますね。馬市で一生懸命丹念して育てた二才馬を売ったんです。その時の金で五円です。一頭が一円五十銭の馬もありました。自転車より安かったです。五円で売ったもんだから嬉しくてしようがない。五円の金つかんだことがないわけですから。郵便局に持って行って預ければいいんだけど、何だか取られるような気がして毎日懐に入れて歩いていたら、とうとう落ちてしまったんです。

「やあ、いたましいことした」って言うから、「どうした」って聞いたら、「こういう訳で金落してしまった」って。そういう人もいました。

労働と飯

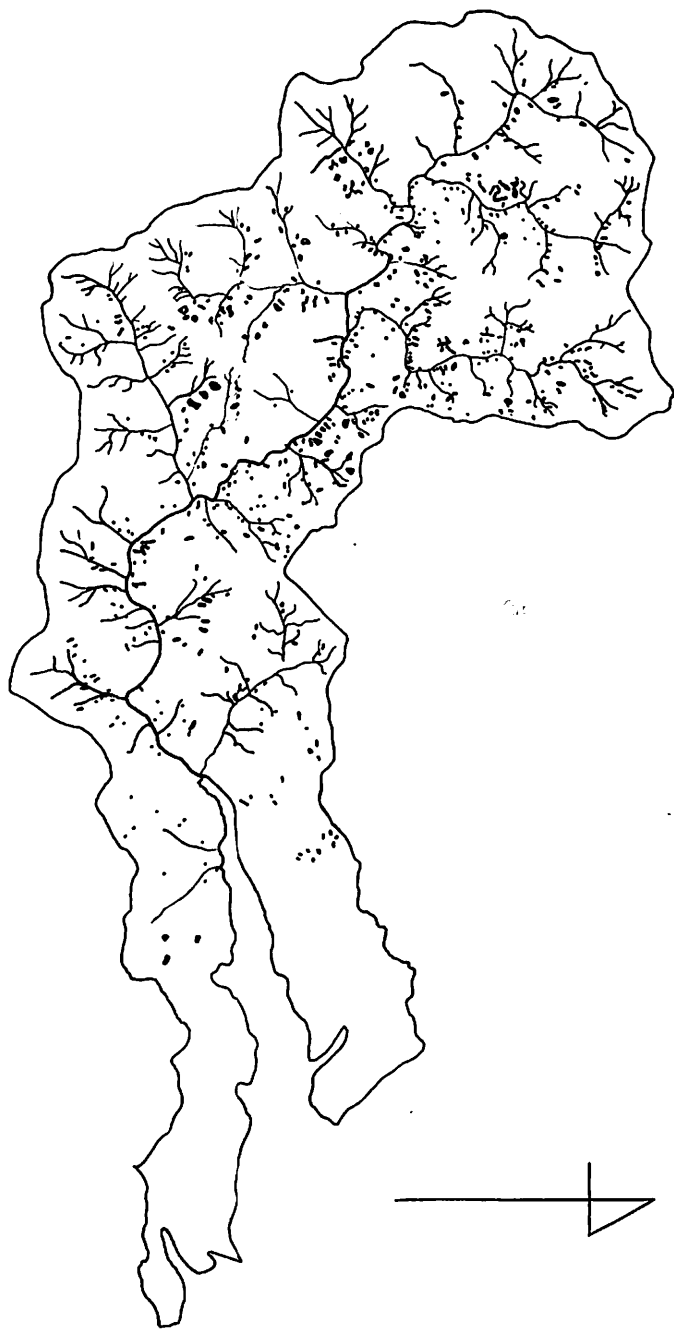
百姓は食わなけりややっていけないんです。親子に五人の子供がいたら、年に平均百俵のイモを食べるんです。一俵十五貫、百俵食べるんです。それ以外にソバ何十俵、イナキビ食うでしょう。麦食うでしょう。米食うでしょう。すごい量ですよ。それだけ食わなけりや身体持たないです。

百俵のイモ、全部が正食じゃないですけれどね。六十俵くらいは澱粉として食べるんです。あとは正食用で。家族が多いといっぺんに石油ガンガン山盛の皮をむくんですよ。だから農家の内儀さんイモ剥くの速いったら機械みたいなもんです。手の中でクルクル一回転したら皮剥けているんです。それを大きな鍋で塩茹でにして、

あと沢庵で終ります。ま、牛乳飲めばいい方でした。そういう生活私もしてきましたけどね。

街へ来ると贅沢になりますね。駄目なもんです。昔のことを思い出して、ああこりゃあうまくないなと思えます。私、今食べたいただけ食うと一ヶ月過ぎると八十キロ越します。登山靴も履けないですよ。とつても前に屈めないですよ。腹が出て。これじゃ駄目だと思つて、今、減食しています。二食にしているけど、それでもどうかすると肥ってきますね。百姓の時、一升飯食って、牛乳一升飲んでても痩せてガラガラしてました。そういう食いの関係もみてね、百姓の労働がいかにひどいのかとシミジミ思います。それだけ稼いでも金にならない仕事なんです。

荒廢地分布圖（札内川流域）



日高中央横断道路計画に係る資料

＝日高山系崩壊地調査報告書（帯広営林局）から

環境、軽視か道の対応

日高中央横断 道路建設計画

調査費計上の段階で

内部討議なかつた

「守る会」が
文書示し追及

開発が、自然保護で論議を呼んでいる「日高十勝中央横断道路」の建設計画をめぐって、これに反対する「日高山脈を守る連絡協議会」(二十二団体、七千人)の対道交渉が五日、道庁八階会議室で行われた。同協議会は、五十四年度の道開発予算に同道路の調査費が計上された背景に、道開発庁が「着手に異存はないか」と道にたたしたのに対し「採択したい」と土木部長が返答した文書を初めて提示「環境保護の立場に立つ生活環境部は、この結論を出すに当たって慎重な検討を加えたかどうか」と追及した。これに対し、生活環境部は「既に聞いた程度」と答え、事実上のゴーサインともいえる調査設計段階で、環境保全上の「意見」がほとんど内部討議されなかつたことを裏付けた。また同協議会が、この「採択OK」の根拠となった道開発庁の環境調査や経済予測の資料を公開するよう求めたのに対し、道側は「あくまで行政判断の素材なので公開できない」と突っぱねた。



日高横断道路問題について道と交渉する「日高山脈を守る会」のメンバーたち(道庁で)

交渉には同協議会の主力団体である「北海道自然保護連合」の四方谷吉郎代表、田中則子事務局長ら七人と、道側から土木部長、生活環境部の課長、課長補佐らが出席した。文書は昨年十二月交わされたもので、住民側は「この文書はどうか読んでも、開発庁が建設について道の意向をたし、道がそれに答えたもの。新規事業に調査費がつくのは、一般には建設を前提としたものに限られる。一冊に二千万円、総額三百億円もの大事業で、しかも日本有数の秘境、日高の中央をぶち抜く道路の建設問題に、生活環境部はどうかかわったのか、土木部から相談があったか」と問いただした。

しかし、この道路予定地が近く公園区域にかり、その所管が同開発庁が指定するとみられる「生活環境部であることなどから

これに対し、樋口松雄生活環境部自然保護課長は「お話しはうかがった。環境保全対策を講ずればという、言わば、たし書きがある問題はないはず。私どもは昨年十二月の時点を道としてOKを言ったというふうにはとらえていない」と説明した。

問題の文書 (要略)

①道土木部長 北海開発庁地政課長 計画概要、環境影響について打ち合わせ、検討がすすめられてきたが、道において異存がななく、アセスメント(環境影響評価)道道認定等の手続きを経て五十四年度において着手できる見通しがつけられれば、五十四年度予算編成において開発道路の新規制所の採択を図りたいと

考えるので意見を伺いたい。 五十二年十二月二十七日 ②北海開発庁地政課長 道土木部長 道内十勝中札内線道路は、日高十勝間地域の開発に極めて重要な役割を果たす道路と見做され、これまでの結果からみて今後、実施に当たり適切な環境保全対策を講ずれば、特段の支障が生じないものと考えられるので採択したい。 五十二年十二月二十八日

は「あれは公開を予定して作られたものでなく、しかも道の資料ではない。現在、道の評価を加えて評価書にまとめている。十二月中旬にまとめる予定なので、関係町村はじめ住民にも公開する。道アセスメント条例に基づいて環境影響評価協議会にもかけ、重大な意見や提言があれば十分に話し合いを全対策を講ずれば、特段の支障が生じないものと考えられる」と回答。住民らは「知事の判断材料に使った資料を住民に見せられないというのは行政の横暴」と追及したが、物別れとなった。

「国の調査費要求という重要な知事判断に土木部サイドの意向だけが参酌され、環境保全の意見が無視されたという疑いはぬえな。それも生活環境部の姿勢が甘いからではないか」と追及される。一方、住民側は道が「判断の材料とした」という道開発庁所管の環境調査、経済予測を八冊の資料について公開を求めたが、道側

北開地第 6 号
昭和53年12月27日

北海道土木部長 殿

北海道開発庁地政課

静内中札内間道路について (照会)

かねてより北海道並びに関係町村等から強い要望のあつた標記道路の開発道路としての建設については、当該道路が国定公園の指定が予定されている地域を通過するため、その計画概要および環境影響について道および北海道開発局において、打合せ・検討がすすめられてきたところであるが、これらについて道において異存がなく、また、今後環境アセスメント、道々認定等の手荷を経て昭和54年度において事業に着手できる見通しがえられれば昭和54年度予算編成において、当該道路を予定して開発道路の新規箇所の採択を図りたいと考えるので貴意を伺いたい。

道路第 1306 号
昭和53年12月28日

北海道開発庁
地政課長 殿

北海道土木部長

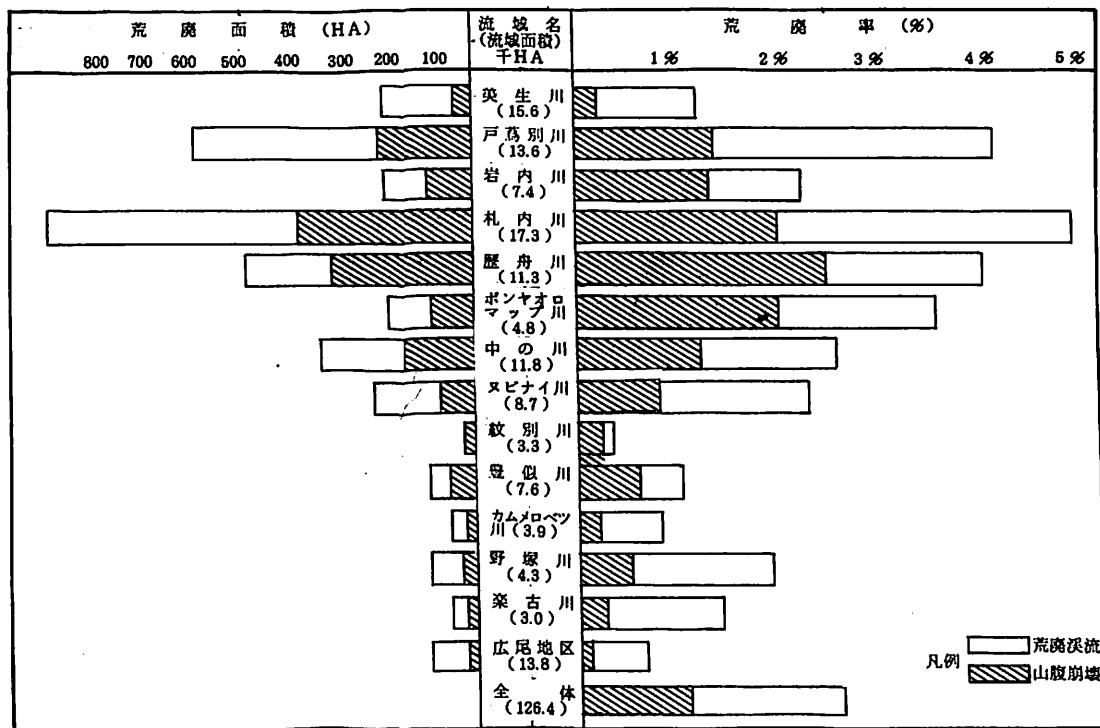
静内中札内間道路について (回答)

標記については、日高十勝両地域の開発に極めて重要な役割を果たす道路と思考され、その環境影響についてはこれまでの調査結果からみて、今後実施に当り適切な球境保全対策を講ずれば、北海道開発局から提出された事業計画概要によって特段の支障が生じないものと考えられるので、昭和54年度予算において開発道路として採択願いたい。

なお、今後の諸手続きについては北海道開発局から環境調査および検討結果による環境アセスメント報告書を受けて、昭和54年度予算の執行に支障のないようとりすすめたいと考えている。

(土木部道路課)

流域別荒廃地面積及荒廃率



活 動 日 誌

- 8月9日 野幌開拓の村について話し合う。
(北農試会議室にて)
- 8月17日 札幌石山スキー場計画について札幌市から説明をうける。
- 8月23日 日高中央横断道路問題について関係団体・機関と話し合う。
24 (東京にて、田中・小野)
- 8月25日 第9回全国自然保護大会で日高中央横断道路計画反対アピールを出す。
26 (富山市にて)
- 8月28日 日高中央横断道路計画パンフレット完成。
(5万部)
- 8月29日 日高問題について浦河町議会議員と話し合う。(浦河町にて、田中)
- 9月1日 第9回北海道自然保護シンポジウム開催・代表者会議
2 (帯広市にて)
- 9月14日 坂本直行山岳カレンダー完成
(4千部)
- 9月21日 日高問題等につき十勝自然保護協会と話し合う。(帯広市にて、田中)
- 9月22日 大規模林業圏開発構想について、旭川大雪の自然を守る会主催パネルディスカッションに出席。
28 (旭川市にて)
- 9月29日 山岳映画と講演の夕べ・道央勤労者山岳連盟主催で日高問題アピール。(札幌市にて)
- 9月30日 日高山脈を守る連絡協議会代表委員会に出席。(札幌市にて)
- 10月5日 十勝自然保護協会と話し合う。
6 (帯広市にて、田中)
- 10月9日 札幌石山スキー場計画について国土計画KKから説明をうける。
- 10月10日 静内町議会議員等と話し合う。
11 (静内町にて、田中)
- 10月14日 定山溪ダム(旧称小樽内ダム)現地視察。
- 10月21日 '79合同教育研究会第22分科会で日高問題について説明する。
(札幌市にて)
- 10月25日 定山溪ダムについて石狩川開発建設部と交渉。
- 11月2日 対道交渉打合せ
- 11月5日 第2回対道交渉(日高問題)
(道庁8F1号会議室)
- 11月8日 日高問題について、関係機関、団体と話し合う。(東京にて、田中)
- 11月10日 帯広畜産大学祭で日高問題講演・討論会
11 (帯広市にて、田中)

この他、毎週火曜日7時より事務局会議を開いています。

編 集 後 記



「平氏を滅ぼす者は平氏である。鎌倉を滅ぼす者は鎌倉である。おごりの弊害こそ戒めなければならぬ」——ある新聞に載せられていた徳川家康の残した言葉です。近頃の政治を評したものでしたが、政治の世界のみならず身近な生活の中にも常に思いあたる言葉です。特に日高問題に関しては国・道といった権力のおごりに腹が立つ毎日です。

会報発行が一カ月ほど遅れてしまい、読者の皆様にお詫び致します。次回発行予定は、来年一月中旬です。

坂本直行山岳カレンダー(一部千円)・日高道路計画現地調査報告書(一部五百円)・日高山脈ポスター(一部四百円)を販売しています。ご希望の方は事務局まで (編集部)

一九七九年十一月十六日発行
編集発行 北海道自然保護団体連合
事務所 札幌市北区北十一条西一丁目 北海道自然保護センター内
振替口座 小樽 四〇七二
連絡先 (〇二)八五一九二四一
内線 六八(代表 四十万谷吉郎)
(事務局長 田中明子)
印刷 株式会社北海道共同印刷所